

市文学祭

教育委員会と市文化協会では、第19回富岡市文学祭を開催します。

- 日時 2月21日(日) 午後1時30分
- 会場 生涯学習センターホール
- 内容 ▷文学講演会
講師 大橋政人さん



1943年新田郡笠懸村（現在のみどり市）に生まれる。東京教育大学在学中から詩作を始める。詩集に『ノノヒロ』（紫陽社）、『キヨシ君の励ましによって私は生きる』（紙篇社）、『パンザイ、パンザイ』（詩学社）、『春夏猫冬』（思潮社、H氏賞候補）、『歯をみがく人たち』（ノイエス朝日）など。少年少女詩集の分野では、個人詩集『十秒間の友だち』（大日本図書、12人の詩人による叢書「詩を読もう！」の中の一冊）のほか共著多数。そのほか福音館書店から絵本『みんな いるかな』など。雑誌「ガーネット」「東国」同人。上毛文学賞、群馬県文学賞受賞。日本現代詩人会、群馬詩人クラブ会員。県文学賞選考委員。

▷俳句・短歌・詩の入賞者表彰式

- 問い合わせ 文化課（かぶら文化ホール内） ☎60-1230

美術博物館

収蔵品展 暮らしのうつりかわり

「予祝 ～豊かな実りを願って～」

2月20日(土)～3月28日(日)

その年の豊作を願って行われるさまざまな予祝行事を写真パネルなどで紹介します。通常の料金でご覧いただけます。



- 2月23日(火)は、展示替えのため、臨時休館となります。
- 2月24日(水)からは常設展示室で「収蔵品展」(歴史・民俗)を開催します。

問い合わせ 美術博物館 ☎62-6200

富岡市内出土品展

教育委員会では、平成21年に市内で実施した発掘調査の最新成果を展示・公開します。多数の出土品を展示するほか、無料でだれでも楽しめる挑戦コーナーもあります。

- 日時 2月11日(休)～14日(日) 午前9時30分～午後5時
 <遺跡説明会> 2月14日(日) 午後2時～3時
 <挑戦コーナー> 午前10時～午後4時
 ▷勾玉づくり・古代の衣服を着る 2月11日(休)、13日(土)、14日(日)
 ▷つるカゴづくり 2月13日(土)、14日(日)
- 会場 美術博物館市民ギャラリーおよび創作室（遺跡説明会）
- 参加費 無料
- 問い合わせ 文化財保護課文化財担当（☎内線1384）



市民の文芸

詩

雪の宝石
昨夜来の雨は上がり
太陽の光は キラキラと
ふりそそぐ

庭先にあるステンレス製の 物干し竿に
同じ間隔で付いた 無数の雪
日を受けて虹色に輝いている
私の見る角度によって見事に色が変わる
並んだ宝石は私の知っている
様々な石の色を讀んで見せている

光と水と時間
この三点で織り成すこの芸術
自然の素晴らしさに
私は しばし 足を止める

俳句

胸にゐる夫と浸りし袖子の風呂
金婚や夫ともろ手に初日受く
雪螢遊び疲れて母の背に
学童の心にめしひ冬温し
熱燗の香りに酔へる女どち
姉の手を借りて臘梅触れてみる
一年の思ひを込めて賀状書く
冬の星カシオペア座を覚えけり
着ぶくれてにぶい動きの部活動

高橋 洋一 選

- (曾木) 入山 静子
- (下黒岩) 吉田シズ江
- (後賀) 湯山 典子
- (富岡) 折茂 昭
- (下高瀬) 小林 春代
- (野上) 小金沢基久江
- (七日市) 金田きみ子
- (曾木) 曾根はるな(重三)
- (曾木) 曾根 静華(重三)

宮前利保子 選

- (上丹生) 赤石 静江

短歌

宮前しづ子 選

- 運動会仮装行列の黄門さま敬老席に「お達者で」と言ふ
(七日市) 恩幣 森造
- 葉の落ちて実のみ残れる紫式部その実にも冬の昼陽輝く
(七日市) 飯塚有紀子
- 山茶花のくれなゐ淡くほのぼのと年行く庭に長く咲き継ぐ
(下丹生) 松本 久枝
- 落葉焚く煙たなびく長学寺冬の夕陽が隠しくそそぐ
(下高尾) 金田てるじ
- 妖精が空から降りてくるように北軽の林に細雪降る
(上丹生) 高橋 恵子
- 藪柑子赤実たわわに群生す踏まぬようにと里山歩く
(下高尾) 小林 勝明
- はるかなる雪の浅間を眺めつつ師の歌碑なぞれば枯葉舞ひくる
(白岩) 金井 幸子
- ひと筋の飛行機雲の伸びゆきぬ十二月八日の澄みたる空に
(南蛇井) 横田 久子
- 空屋に季来るたびに柿の実のたわわに生れり夕陽を受けて
(七日市) 関 明子
- 白菜に虫が一匹雨やどり鎌を片手にわれも見てゐる
(下丹生) 野口 栄子

川柳

猛選

- 湯たんぼが母の温みを偲ばせる
(一ノ宮) 田島 悦子
- 夫婦して七草粥を吹いている
(上高瀬) 峰岸十四男
- 染みが出来頑固も様になつてくる
(富岡) 金井 君代
- カルタ取り負けて涙の利かん坊
(富岡) 湯浅サチ子
- 爺ちゃんの先ずは眼鏡をむしり取り
(野上) 飯塚 邦武
- おんぶした孫にナビされ筋肉痛
(一ノ宮) 大野 里子
- 山離れ風にまかせた雲の旅
(富岡) 大河原富美
- 梅一輪日本の春を告げている
(富岡) 黒沢 繁
- 焼きそばのソースが匂うだるま市
(一ノ宮) 保坂 敏夫
- 開花まで忘れられてる桜の木
(相野田) 小柴真知子

近代産業の夜明け

富岡の 明治維新

86

富岡製糸所がいよいよ入札に付される際、速水堅曹が特に配慮したところがある。

彼は、どのような人に落札されるにも国家のためと考え、製糸所内の破損されているすべての箇所を修繕し、今後の所有者の利益を優先する方策を立てていた。結果的には三井が入手した訳であるが、これについて彼は「今有名の三井が落札したのは、当所の将来に大きな望みがある」と記している。

そして、「もし三井が引き続いて自分に経営を任せてくれるならば、自分は官営時に倍する功績を挙げて、この製糸所をわが国の模範工場にする自信がある。三井から丁寧に頼まれれば、三井は莫大の利益を得、天下に名誉を輝かし、自分も必死になつて勤める」また「自分に任せず担当者 came 来た時には、自分の養子と見なして、全てのことを伝授して立派な後継者となるように指導したい」という期待感を寄せていた。

しかし、待っていた結論は「三井はかえって速やかに自分の退去を本省に願ひ出た」のである。

この措置について速水の想いは「同家の闇きを惜しむ。恐らくは永続すべからず」という考えに傾き、「自分が貢献してやりたい」という気持を捨て去つたのであった。

速水堅曹は、この時の気持ちを変わりたるにつけて」と題して、次のような短歌に記している。

おもひきや手植の菊も此頃の
あめと風とにあはむものは

富岡製糸所を、自分が丹精込めて育て上げた菊になぞらえ、「これからの激しい雨や風に耐えていけるだろうか。そんなことは思っても見なかったことである」と解することができる。

自分が長年関係してきた富岡製糸所に対する愛惜の念や、三井が自分にとつた限らない憤懣を短歌に託したと同時に、三井の経営となった製糸所の命運を予言していたようにも受け取ることができる。

(今井 幹夫)

富岡製糸場の歴史を紹介しています。過去に掲載されたものを見たい場合は市長公室にお問い合わせください。